大山街道

―取残された道の印象―

山本秀男

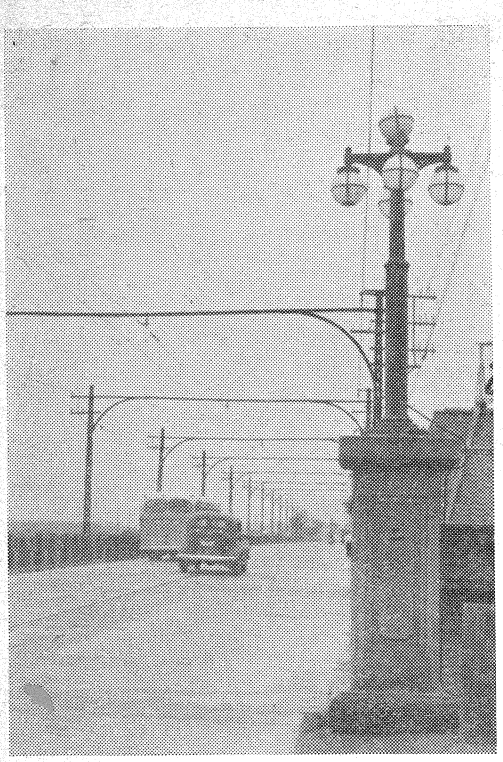
名所、古跡がなくてもよい。見所がなくてもかまわない。ゲームや合唱をする芝生がなくても差支えない。

「道ある所ハーキユレスあり」

このキヤツチフレーズを借用すれば

「道ある所サイクリングコースあり」

道は何にも云わない。けれども表情がある。モナリザの微笑のような捉え所のない道もあれば、アメリカ人のように派手な表情をしている道もある。或る所では滅法明るく、ある所では泣きべそをかいている。そんな道の表情が私は好だ。だから路傍の僅かな草むらを求めて弁当を喰うような破目にあつても、何の見所もない道を走る。大山街道もそんな道の一つである。



二子橋は今ではこの街道の入口だ

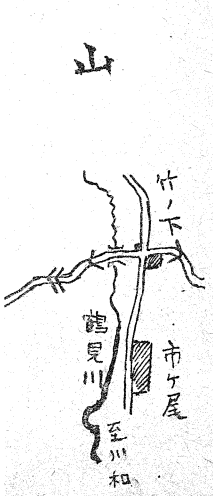
大山街道は裏道である。東京から出る殆どの街道が、いずれも産業上重要な道で、立派に鋪装され、重要な都市、都市を結んで遠くまで延びる。だが大山街道は都筑の丘陵を横切つて相模ケ原の小さな都市へとひそかに延びる。不偶なことには沿道に観光地がない。誰も食指をのばさないから栄えない。取残された街道である。

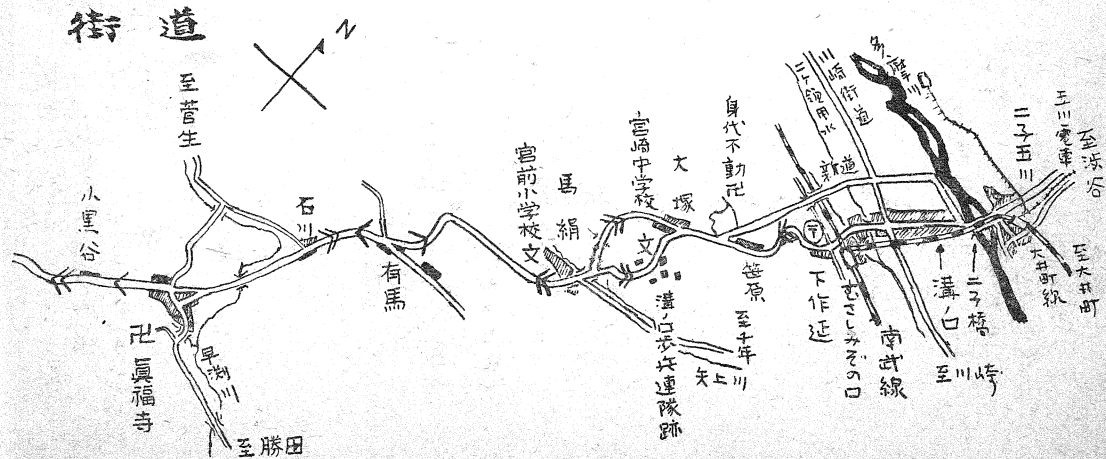
大山街道は溝ノ口から先、サイクリストの影をみる日が少ない。道が悪いという理由よりも見るものがないということに起因するらしい。いまのサイクリストには愛されない道なのかもしれない。

そんな大山街道を私は愛するしかも一番取残された都筑の丘陵を横切る当りがとりわけ好きだ。

大山街道を走れば都筑の丘陵への入口は溝ノ口である。大正十四年七月に俊工した二子橋は当時では立派な橋だつたと思う。橋の入口に立てられた電燈もいまでは古風なものになつてしまつて、最近登戸に出来た電燈と較べれば、三十年という歴史の移りを知ることができよう。私の少年の頃、道は砂利道に変る。ここから都筑の丘陵が始るのだ。大きくカーブをしてともかくも登りつめて見給え。麦畠はみんな円

狭い道すじ一杯にせり出した家並は、いかにも旧い宿場を思わせるが、いまでも前は藁吹きであつたろう屋根の形がその





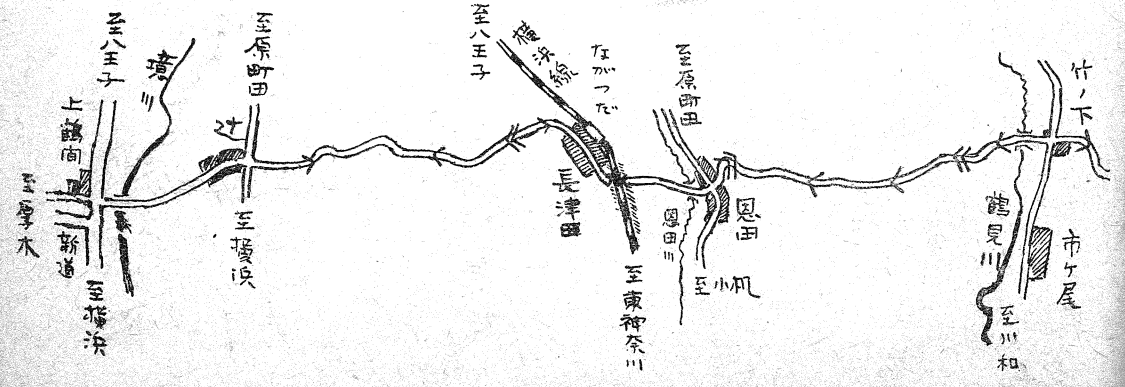
燈と較べれば、三十年という歴史の移り替りを知ることができよう。私の少年の頃はこの橋を玉川電車が渡っていた。今は大井町線が渡っている。二本の長いポールを立てて玉川電車が一輛、ゴトゴトと渡っていた方が、この橋には似つかわしい。

溝ノ口は旧い宿場である。昔、江戸の大山講の連中が、阿夫利（大山）詣にかこつけて遊びに出かけたというのが、この大山街道だが、講中の人々の賑々しさを偲ぶとすれば、この溝ノ口であろう。

溝ノ口は何となく往時の古い面影がある

狭い道すじ一杯にせり出した家並は、いかにも旧い宿場を思わせるが、いまでも前は藁吹きであったろう屋根の形がその幾軒かに残り、田舎によくあるような雑貨屋が、俟つぽい色をして、いまでもひそかに家業を営んでいる。狭い道に渋谷行の大型バスが通ったり、トラックが通るので、ゆつくりこの街を見ながら走るというのは危険だが、日曜日の朝早くこの町を通るなら、その風貌に接してペダルの速度をゆるめるに違いない。そして渋谷から二子橋を渡るまで、大山街道という名を忘れていた人でも、この溝ノ口に来て街道の名を知るのではなかろうか。そんな町が溝ノ口なのだ。

溝ノ口は縦に長い町である。けれども川崎街道が横切るとき自動車もサイクリストも吸い込まれるように川崎街道に流れこんでしまう。だから十字路から先の溝ノ口はだんだん淋しくなる。特に二ケ領用水を渡るころは田舎町である。二ケ領用水の大石橋に足を下して右をみて見給え、そこには畠がみえる。左を見給え、布を晒している染物屋の職人の威勢のいい手ぶりをみることができよう。そんな風景にみとれていると溝ノ口の町はすぐ出外れてしまう。

下作延の郵便局を右に認めた頃、道は砂利道に変る。ここから都筑の丘陵が始るのだ。大きくカーブをしてともかくも登りつめて見給え。麦畠はみんな円い線を画いており、その先にはすぐ別の丘陵を見出すだろう。ひとが新宿を出てから、また渋谷を出てから一時間も走つてまだ東京の臭をかいでいるとき、貴方は僅か三〇分そこそこで、畠の中の白い砂利道を走つているのだ。若い恋人同志が歩いている姿を美しいと思う人なら、愛車とともに、この田舎道にいる貴方自身が、若い恋人たちに似て美しくもありまた人に羨まれる存在となつていることに気がつくであろう。

この当りはしばらく丘の上を走るが、右側にある人家の埃つぽいのに淋しさを感ずるのではなかろうか。しばらくいけば、南武線を陸橋で跨いで来る新道と一緒になる。身代り不動と書いた大きな導標をみるのもこの所である。埃にまみれて一見わかりにくいが、導標の一番下を注意してみるといい。北三丁とかいてある。ここでは北は右手になる。その横丁へ入ろう。畠の中の小道をブレーキをかけながら降りていくと小さな不動様